

みこころ

第15号

2010年
4月4日

発行元:

カトリック城北橋教会 広報委員会

〒462-0847 名古屋市北区金城1-1-57

TEL(052)912-7123 FAX(052)935-2254

(HP)http://johokubashi.mikokoro.net



INDEX

- 「新しい命を帯びて、主は生きておられる」 プリヨ・スサント神父 (p2)
- 「今日こそ神がつくられた日」 ヘルマス・アスンビ神父 (p3)
- 「神学生日記」 片岡義博 (p4)
- 「寄稿」 八幡京子・榎木毅・須藤ヨシ子・清水綾子・神谷史・伊集院綾香 (p5~7)
- 「クリリー神父様を偲んで」 川口琢・水野英子・朝見鈴子 (p8~9)
- 「岡田さんの思い出」 木全和子・大道紀美子 (p10~11)
- 「介護における霊的成長」 シスター林明恵 (p12)
- 「養成講座を受けて」 清水隆・飛石喬 (p13~14)
- 「緊急支援活動最終報告」 三井浩子・田村由美子・八幡京子・柴田かをる (p15)
- 「信者動向」 (p16)

新しい命を帯びて 主は生きておられる

主任司祭 プリヨ・スサント

「週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った」(ヨハネ二〇・一)。復活主日にいつも読まれるこの福音の箇所、この出だ

しの文書は、何か大きな出来事が秘められるような雰囲気を感じている気がしてなりません。何か、爆発的なことが隠されているかのように感じ取っています。

昨日までの大きな騒ぎ、イエスの十字架の死刑の騒ぎのあと、嵐が去ったような静かな夜の朝早くまだ暗いうちに、一人の女性、マグダラのマリアが闇の中



枝を持った会衆を祝福するプリヨ神父様。共同訳ではなつめやしとありますが、パームを昔は棕櫚(シュロ)と訳していました。そこで棕櫚と形状が似たソテツを枝の代用に使っています。

墓へ向かって出かけた。この行動自体は勇気ある行動だったのですが、ここから急展開が繰り広げられたのは。彼女が墓に着いた瞬間から、すべてがあらわに。わたくしは驚きました。洞穴の墓をふさいだ石が取り除けてあつて、イエス様の遺体はどこにも見当たらず、慌てて彼女は弟子の家へ走つて、イエスの遺体がないことを告げました。



大きなだちょうの卵は清水さん(在タイ)の置き土産。平川さんのペインティングですが一つは清水さんの作品。

と。

ですが、「イエスは必ず死者の中から復活されることになっている」と言う聖書のことばを、二人はまだ理解していなかったのである」と福音者ヨハネは書き記しました。主が死者の中から復活するという真実は、偉大な信仰の神秘なのです。この偉大で神秘的な出来事である主の復活にこそ神の救いのご計画が完成されるのだとわたしたちは希望を強く持ちながらお互いに励ましあつてキリスト者として生きるのです。

この神秘を受け入れ、信じる者は幸いでありましょう。この神秘を受け入れ信じ、その信じることに従つて生きよつとする者は幸いです。

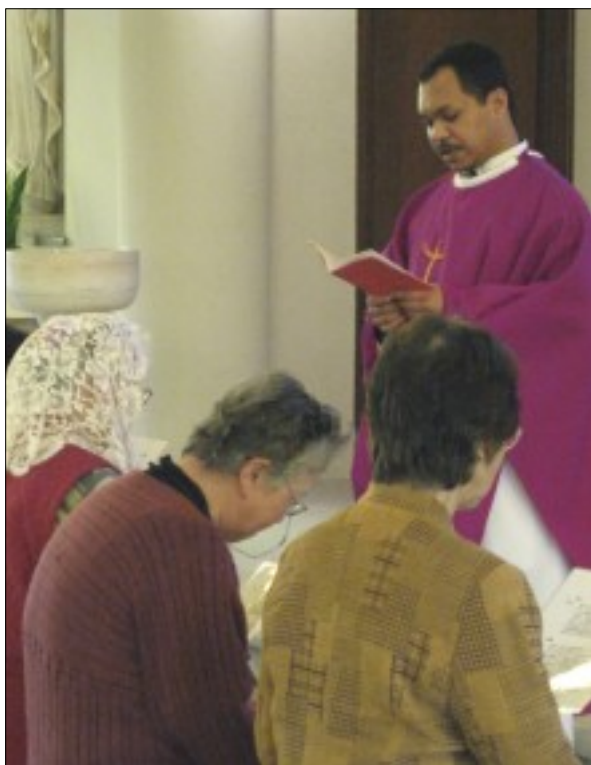
復活祭、おめでとうございま

今日こそ神がつくられた日

助任司祭 ヘルムス・アスンビ

キリストは復活されました。アレルヤ！

復活祭にあたり、喜びに満ちあふれた日がわたしたちに与えられ、喜びましょう。神様がキリストの受難と復活を通して、わたしたちを救ってくださいました。この偉大なわざを感謝するうちに、喜びましょう。復活されたキリストは死を打ち砕



き、永遠の命の門を開いてくださいました。それは罪に陥った人間を神様のもとに取り戻し、救うためだったのです。ヨハネ福音記者はイエス・キリストの復活についてこう記しています。「シモン・ペトロは墓に入り、亜麻布がおいてあるのを見た。それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入ってきて、見て、信じた」（ヨハネ一〇・六〜八）。その信仰をもって、シモン・ペトロは自分の目で見た栄光に輝くキリストの復活を証して来ました。そのお陰で、今、わたしたちも同じ信仰を持って、キリストのご復活を厳粛に祝って

います。すなわち、シモン・ペトロと他の弟子と同じように、わたしたちも信仰によって復活されたキリストに結ばれて、その救いにあずかっているのです。キリストが復活されたことを信じているわたしたちが、シモン・ペトロと共に、今日、この聖なる日に、救いの恵みを受けています。そのため、この日をとくに喜びましょう、今日こそ神の御業の日ですから（詩一一八・二四）。

救われた喜びのうちに、新たにされた者として生活を送って行きましょう。神の赦しを受けた上で、わたしたちは罪から解放された、清い心で、つまり愛に満ちた心で、新たな生き方を始めていくはずですよ。パン種が練り粉全体を膨らませるように、罪がわたしたちの人生を損なうのです。そこで、聖パウロはパン種のたとえを使って、復活への信仰による人生を話しています。聖パウロにとって、キリストはわたしたちの過越の子羊として屠られ、その聖な

三月七日、病者の塗油をされるヘルムス神父様

パスカル・キャンドル

「ご復活のローソクは復活徹夜祭から主の昇天までの四十日間（実際には四十九日です。



六回の主日に加え、日本では主の昇天を木曜日から次の日曜日までずらし、計九日多いこととなります。四旬節の四十日間も同じように主日は除いて計算します）ずつと、灯されています。つまりこのローソクは主の復活の象徴であり、この火はキリストの光なのです。平川さんが見事に復活のローソクに桜を描いてくださいました。感謝。なお、昨年の汚れを綺麗に取り除き、その上に描いていたのだからです。再生作業による、文字どおりの復活のローソクであります。（後藤）

る血によって、わたしたちは清められ、パン種の入っていない者になったのです。だから、古いパン種や悪意と邪悪のパン種を用いないで、パン種の入っていない、純粹で真実の者として、生活を送って行きましょう。（一コリント五・六〜八参考）。これはわたしたちが復活されたキリストに結ばれたこととしるしなのです。

キリストのご復活によって、わたしたちの信仰が強められ、また心が清められたことをわたしは誇りに思っております。それで、その誇りを持って、シモン・ペトロと他の弟子たちと同じように、その復活の証人になりましょう。使徒ペトロは復活されたキリストご自身によって力づけられて、その復活を積極的に証してました。ご自分の受難と復活によってキリストが罪深いわたしたちを救い、救ってくださいましたことを心に留め、それを証することはわたしたちの使命なのです。（使徒言行録一〇・四二〜四三参考）。その証しすることによって、多くの方がイエスの名にひざまずき、「イエス・キリストは主である」と公にのべて、父である神をたたえますように（フィリピ二・一〇〜一一参考）。

神学生日記 共同体で 祈る大切さ

ヨハネ 片岡 義博

主のご復活おめでとござい
ます。今年には教会の桜が満開の
時期のご復活となったことと思
います。私もおかげさまで、無
事に神学校生活の一年目を終え、
四月から二年目(哲学科「年生」
に入ります。昨年一年間の神学
校生活は、お祈りも、勉強も、
そして仲間との共同生活も色々
なことが新鮮で、覚えることも
必死で、あつという間でもあり、
でも充実した一年だったと振り
返っています。

しかしながら、神学校生活も
そんな楽しいことだけではあり
ません。時には試験も与えられ
ます。この一年で特に苦労した
ことを少し分かち合えたらと思
います。それは神学院の入学し
たての頃、ある先輩から言われ



た一言から始まりました。「片
岡は歌は上手いけれども、もっ
とまわりと合わせて歌わなあか
んよ」という一言でした。最初

片岡くんは何処にいるのかな？ いたあ～ 神学院の卒業式と修了式合同の記念写真
だけにピカピカの一年生らしく遠慮している・・・でも、やっぱり大声で歌っていたんだ・・・

は、別にそんなに大きい声で歌っ
ているワケでもないのにと感じ
ながら、先輩のおっしゃること
が良く分かりませんでした。
しかし、五月の連休が明けて
た頃に、院長との面談があり、
そこでも同じようなことを言わ
れたのです。そして、「もっと、
まわりの息づかいを注意深く聴
きながら、祈り、歌ってみなさ
い。そうすることで、祈りも深
まるし、それが私たちの日常生
活にも大切なことだということ
に気がつくから」とおっしゃら
れた時、ハツとさせられました。
今まで城北橋教会にいた時も、
またそれぞれの場でミサにあず
かる時にもそのようなことを今
まで気にもしたことがなかった
私にとっては、共同体で祈るこ
との大切さを考えさせられた院
長のアドバイスでした。

このことは私だけではなく、
他の何名かの神学生にも同じよ
うなアドバイスがあったようで
すが、その院長のアドバイスに
気をつけながら、私自身この一
年少しずつ直していきました。
決してまだ充分とは言えませ
んが、自分の祈りの姿勢に変化を
感じることができました。そし
て、自分の気持ちに神さまに向
かって、感謝と賛美を捧げるだ
けではなく、司式司祭、オルガ
ン、そして会衆全体がひとつに
なって、息づかいを合わせる。
それが皆で心を合わせて祈ると
いうことなんだろうなというこ
とを学びました。
"Lex orandi creandi stater
" "祈りの法則が信仰の法則
を定める"という聖ペロスペル・
アクイタヌスの言葉を、学期末
の典礼音楽の試験で覚えました。
本当にひとつひとつ祈りも共同
生活も大切にしていきたいと感
じました。
そして、その言葉を味わいな
がら、まだ私が大学生の頃、当
時城北橋教会の主任司祭だった
スミス神父様が聖堂で祈ってみ
えた姿を思い出しました。スミ
ス神父様がオーストラリアで亡
くなられて、この四月で早いも
ので五年になります。私にとっ
て尊敬する師の一人でもあり、
可愛がって頂いたスミス神父様
の為に永遠の安息をお祈りする
と同時に、私が司祭叙階までの
道のりを歩めるように見守って
いてください、とお祈りしなが
ら、四月からも頑張っていきた
いと思います。どうぞよろしく
お願いいたします。

共同体からの 学びに感謝

ルーズ・マリアック
八幡京子

主のご復活、おめでとございます。初めて城北橋教会を訪れてから八年、二〇〇六年の復活祭で洗礼のお恵みをいただい



教会の右も左もわからない私ですが、日曜学校や女性部の活動を通して、プリヨ神父様をはじめ、城北橋教会共同体の皆さんと交流を深められたことは、私にとって本当に神様からのお恵みだなあ、としみじみ感じています。

結婚して郷里を離れ、親類縁者のいない名古屋で暮らし、娘が生まれてからは子育て一本で、限られた人間関係の中で暮らしてきた私には、教会の皆さんとの出会いは、いろいろな気づきの連続でした。お料理やお菓子作り、裁縫や編み物、お花

や野菜に関すること、音楽のこと・・・、神様のもとに集まられた皆さんは、それぞれに素敵なタレントをお持ちで、お一人お一人が、私にとって父母のような存在であり、また、師でもあり、日々、学ばせていただくことがいっぱいです。

そして、この教会で「私ができることって、いったい何なのだろう」と自分を振り返る良い機会もいただいています。また「私の手足でお役に立つなら」とお引き受けした女性部役員を務め、早いもので二年の月日が流れました。元来、人前で話

洗礼志願式

二月二十一日の四旬節第一主日に、洗礼志願式が行われ、七人の方に信条の授与が行われました。山本陽美さんの二人のお子さんである真優子ちゃんと道

隆君、酒井佳子さん、富永満夫さん、岩月陽子さんと、お子さんの慎一郎君とかほりちゃん

復活について ペトロ 榎木毅

二月二十一日の四旬節第一主日に、洗礼志願式となつていますが、他の四人の方は復活徹夜祭に洗礼を受けられます。入信される方の努力

はもちろんです。洗礼志願式を通して、神様の照らしと力づけが必要なのです。こうして教会に受け入れられていくと同時に、共同体も宣教と回心の努力を新たにしていけます。(後藤)

をしたり、リーダーシップをとったりするのが得意ではないので、神父様をはじめ、皆さんに温かく(ハラハラかもしれません)見守っていただき、導いていただき、励ましていただき・・・の二年間でした。貴重な体験を積む機会を与えてくださった神様に感謝するとともに、共同体の皆さんの支えに心から感謝いたします。また、私事ながら、教会委員会の間、私を待っていてくれた娘と、その娘に根気よくつきあってくださった日曜学校のリーダーの皆さんにも、深くお礼を申し上げます。この春、女性部役員を務めは卒業となりますが、これから「私にできることは何だろう」という模索を続けつつ、神様に見守られながら、少しずつでもチャレンジしていけたらと思っています。

感いました。まして題が復活についてであったので初めて深く考えました。

私は、現在四十五歳、洗礼を受けたのは十歳、故郷の鹿児島です。学生時代は、毎週のように教会へ行きましたが、就職をしてからは、教会からは、離れていました。たまにミサにでもお客さん状態でした。

最近、ここ城北橋教会で母の友人である朝見さんと出会い、仲良くさせていただいています。これからは、共同体の一員としてできることをやりたいと思いますので、よろしくお願ひします。

さて、復活についてですが、今回、聖書やいろんな本を読みました。しかし簡単にはわからず、自分の信仰の無さを痛感しました。とにかく信じるのが大事なのがわかりました。イエスが死んだ時には、逃げていた弟子たちが復活したイエスと出会い、その後、聖霊により強められ全世界へ布教していくことには感動します。私も弟子たちにあやかり強くなりたいと思います。

何か出来ることを見つけてやりたいです。今後は、なかなか難しいと思いますが、祈りを増やし聖書をこれからもっと勉強して信仰を深めていきたいと思

「受け入れ合 い」に寄せて ルチア 須藤ヨシ子

「受け入れ合う」とは福音書と自分の体験から思いめぐらして

教区の年間テーマを心にとめ



日曜学校「感謝の会」

三月十四日に日曜学校の感謝の会が開かれまし
た。修了式と日頃、日曜学校をサポートして
くださっている人々への感謝のためのパーティー
でしたが、あいにく当日は女子マラソンのため
の交通規制があり、参加者が少ないのではない
かと心配しましたが、大盛況で子供たちはお
はしゃぎでした。初聖体クラス
のシスター高良、小学生クラスの
シスター林、シスター・リタ、小川さん、宮崎さん、山本君、水野さん、小川シエスリンちゃん、中高生クラスの水口君、片岡君、みなさん本当に有難うございました。特に山本光太郎君は郷里の金沢に帰ることに
なり、まことに残念ですが、新しい人生のスタートをお祝いしましょう。
またご父兄の方のご協力にも感謝いたします。子供のいない教会を想像してください。お爺ちゃんが侍者をしている教会がたくさんあるそうです。ぞっとしませんか。子供達は教会の宝だと言いながら、関係者に任せっぱなしだったのではないのでしょうか。本当は信徒の方が日曜学校のお世話をしてくださいました方に感謝すべきでしょう。反省（後藤）

います。福音ではペトロが「イエスを知らない」と三度否定した後で、外に出てはげしく泣いたとあり、これは主のそばにいたのに、主を裏切った後悔から胸のはりさける涙で、人間のみにくさを知ったペトロ。その弱さを通してキリストを伝える聖者となつて行かれました。私たちも失敗や裏切りを経験して、おろかさ、弱さに気付いて、そこから神を愛すること、人を愛することなど

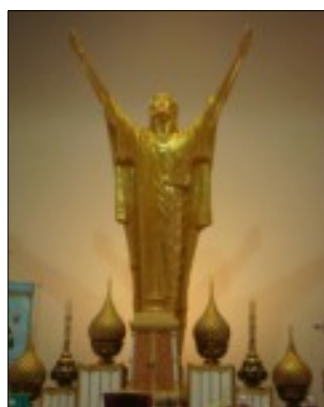
「受け入れ合う」事の前に、自分の長所や短所を丸ごと認めて、長所の影に欠点もあり、短所の中に人の痛みに共感できる良いものがあると知りました。欠点や弱さは私を謙虚にしてくれています。教会の祈りの中に「わたしが信じていた親しい友、パンを分け合った友が私を裏切った」とこの祈りを唱える時に裏切られた悲しみよりも自分がどれだけ

本気で関ったかと問い直しています。自分のおろかさや、見せたくない過去も恵みとなつて今の私が支えられているのです。すべてのものに神の愛があり、すべては神の恵みと心から受け入れるのです。人を受け入れるとは、自分のすべてを受け入れることからはじまり、そこから痛みへの共感、やさしい眼差しで人を見て関り、肩の力を抜いて自然体で接している時に、相手の方から「ほっとします」とか、「ありのままでもいいんですね」との言葉を頂くのです。私たちは日常生活のすべてのうちに神に聴き、愛を味わいながら神に愛されていることをしつかりと心にとどめて、人々と関わり、交わりを続けるときに、神はそこに共にいてくださるのです。

よみがえり

命輝く

復活祭



黄金のイエス像（バンコクの教会で）

は、路地を一回十パーツ（三十円程）で一日に何往復も走ります。露天商や、歩道にミシンを置いて裾上げを専門にしている人、江戸時代の魚売りのように棒の前後の籠に物を入れて売る人もいます。勿論、日本より遥かに進んだ職業に就

タイ駐在便り ディンプナ

主のご復活おめでとつございます。

昨年十一月に夫の転勤に伴い、タイ・バンコクに引っ越ししました。でも教会籍は城北橋に置かせて頂いているので、城北橋教会タイ駐在(?)という事で、寄稿させて頂きます。

我愛新西蘭 マリア 伊集院綾香

私は2009年1月6日から12月8日まで、ニュージーランドのウェリントンに一年間留学しました。ウェリントンはニュージーランドの首都で、山や海があり、とてもきれいな街でした。最初、ホスト・ファミリーと会った時、全く英語が話せず、すごく焦りました。でも、ファミリーはとても優しく接してくれたので、とても安心しました。現地校はTawa College(タワ高校)という学校です。

学校が始まると、直ぐに友達ができました。それは学校の、私たち留学生への対応がとても温かったからです。私の友達は、ほとんどがアジア系で、中国人でした。彼女たちはとても優しく、私が上手く英語が話せなくても怒ったりせず、話を一生懸命に聞いて、私のことを理解してくれようとしてくれました。普通、海外の人間は意見を言わない人を嫌うと言われていますが、彼女たちはそういうことが全くなくて、ありのままの私を受け入れてくれました。ホスト・ファミリーは私が辛い時、悲しい時、いつも支えになってくれて、とても嬉しかったです。

留学では英語以外にもたくさんの素晴らしいことを勉強しました。肌や目の色や宗教が違ってても、受け入れたい、理解したいという気持ちが有れば、分かり合えるということです。私は最後まで支えてくれたホスト・ファミリー、友達、現地の先生に深く感謝しています。そして日本の家族、学校の先生にも心から感謝しています。ニュージーランドで学んだことを忘れずに頑張りたいです。最後に

I'd like to say I love you all in Newzealand
I'd like to gratitude with all my heart
Many many thanks to you all
I love you all beyond now and forever more
Thank you so much

中力も増し、平和への思いを込めた”さとうきび畑”まで歌いきることができた。幕間にお茶の時間をとり会場の方々と交歓したり、全員で”花”を歌う楽しい時間をもうけ、温かい拍手のうちに幕が下りた。その夕べ、メンバー一人ひとりが思いを述べた。三日前に家族が倒れ入院し、すぐ病院へと向かった方、コンサートが終わると入院手術が控えていて精一杯頑張った方、実母が難病を患い、幕間にも何度も連絡をとっていた方、娘さ

一九八〇年、みこころ幼稚園のクリスマス会で当時のお母さんたちがコーラスを披露して誕生したのが「みこころコーラス」です。クリスマスにはミニコンサートを、結婚式では綺麗な歌声で新郎新婦を祝福するなど活躍を続けています。「みこころコーラス」には、指導者の高橋のり子さん、片岡法代さん、神谷史さんの三人の信徒が頑張っておられます。団員を募集していますので問い合わせてください。

く人もいますし、冷房が入った場所でも働く人も沢山います。どんな職業の人にも共通して言えることは、とても元気でパワフルなこと。つきつめて働くのではなく、程良く適度に、貧しくても一生懸命に、毎日を楽しみながら生きてるように見えます。(勿論、各々に悩みはあるのでしょが・・)。

そしてもうひとつ感じたことは、タイの人はとても信仰深いこと。ご存知の通りタイは仏教王国です。デパートやマンションには勿論、どんな小さなお店にも仏陀を祀る祠があり、いつも供物があがっていますし、私達キリスト者が身につける十字架やメダイのように、殆どの人が仏陀を首から下げています。そして日曜日のお寺はお祈りする地元の人でいっぱいになり、参道には供物を売る露店が並びます。日常生活に信仰が深く溶け込んでいることがよくわかります。

一月十一日、冷たい雨の日、小さな会場は満員の熱気に包まれていた。私たち「みこころコーラス」



ちいさなコンサート

マルタ

神谷史

五年ぶりのコンサートの幕が上がった。青い目の人形”アカペラで”あーおい目、あーおい目、”と続く緊張の出だしが、なんと止まってしまった。一瞬会場がざわめく。何十回となく練習してきたのに。本番でつまずくな。だが、そこで先生は落ち着いて微笑んでくれた。会場の空気もほっとゆるんだ。そんな風に始まった演奏だが、それ以後は平常心となり、集

んの出産育児と忙しい中、遠くから通った方、持病を抱え大家族を支えている方、十二人のメンバーそれぞれが困難を乗り越え、心を一つにして作り上げたハーモニーだった。そんな中で、私も今日を特別な思いで迎えていた。六年前の手術、抗がん剤治療を経て、ここに立っていられること、その闘いを見守り支えてくれた家族、友人に感謝を捧げた。そして最後にこのメンバー

を励まし束ね指導して下さった高橋先生、駆けつけて応援してくださった皆様、心からお礼を申し上げます。

クリリー神父様が残念ながら、とうとう三月六日に天国に召されました。七十七歳という若さでした。クリリー神父様は、一九七六年から八四年までの八年間、クワーク神父様のもと、主任司祭として私たちを導いてくださいました。大きな心で信徒を信頼し、人間味あふれる方で、幼稚園の園長先生としても活躍され、お世話になった方も多いと思います。

幼稚園水野先生のお嬢さん青衣ちゃんを抱きしめるクリちゃん。



グッバイ フラン ククリリー神父様の の帰天に想う アウグスチヌス 川口琢

三月六日、クリリー神父様が死亡との知らせを、友人パークさんの国際電話で知らされまし

た。昨年七月、神父様の金祝後に発見された「肺がん」から半年でした。十一日通夜、十二日十時半よりダグラスパーク（修道院・黙想の家・神父様達の墓地）の聖堂にて葬儀が行われるとのメールをポール・ブラウン神父様からいただきました。三月は別れの季節です。卒業などで未来にむかっただけの別れと違い、友人との死の別れは寂しいものです。

クリちゃん（彼ほどこの呼び方が似合う人はいません。尊敬と信頼をこめて・・・）と私の出会いは五十年前にさかのぼります。一九五九年叙階、翌六〇年に日本に就任（二十八歳）。最初は江南の主任司祭で教会建設に尽力、地主との折衝で遺憾なく実力を発揮されたよつです。当時二十四歳の私、同年代のパークさん（元神父）と三人は固い友情で結ばれました。その後、クリちゃんは銀祝を迎え、帰国されるまで、日本での布教に全力を傾けました。教会の規律より、心の大きさ、温かさを重視し、限らない愛情を信者に与えられた。小牧の信者家族と親しくされていたころ、事故で御主人が急死され、残された子供と奥さんが途方にくれておられました。神父といえども奥さんと子供だけのところに訪問が出来ず、困って私に相談されました。父親同様に懐いていた子供の為に、私の友人の別荘を借りて、二人で親子のよつに何日も過ごし、シヨツ

F・クリリー神父

- 1932年・・・オーストラリア・ダーリングハーストに生まれる
- 1956年・・・聖心布教会において最終誓願
- 1959年・・・司祭叙階
- 1960年・・・来日
- 1970年・・・江南教会の設立（初代主任司祭）
- 聖心幼稚園園長
- 1976年5月1日・・・城北橋教会主任司祭（1984年6月30日まで）
- 1984年・・・銀祝、離日
- 1985年・・・オーストラリア・シドニー
- 2010年3月6日・・・帰天

クを和らげるように努力をしました。
オーストラリアでは知人が腎臓病で自宅透析、余命少ない彼の家に機会があるたびに訪問して、食事を共にし、楽しい話で慰め、生きる勇気を与えていました。帰国後の赴任先ダグラスパークでは大改革、神父様とブラザーたちは食事の場所が違っていたのを、兄弟皆同じとテーブルを一緒にして、全員から絶賛された事は有名です。

つもこんな調子でした・・・私のオーストラリア訪問時、パークさん宅で、三人一緒に旧交を温め祝杯を挙げたものです。我々は悪友であり、兄弟のような関係です。昨年七月、「クリちゃんの金祝にお前くらいは参加したら・・・」とパークさんから電話があり、何とか航空券を手に入れて、ケンジントンを訪問しました。その時、クワーク神父様をはじめ、シスター・エリザベス（妹さん）や親戚のケネディー一家（お姉さん）、クリちゃんが私を紹介した数多くの方々に会うことが出来ました。今考えると、かなり病気が進んでいた彼は「金祝」の来るのをひたすら待っていたようです。半年後にこのような別れが来るなどと、その時は想像も出来ない事でした。最後はシスターたちが経営する「養老院」にクワーク神父様と共に入居され、管理が厳しいので、キューバの「グアンタナモ収容所」と一緒にだと、嘆いていましたが、シスター・エリザベスの手厚い介護を受けて旅立った事でしょう。クリちゃん、あなたは自分の信念のもとに、すばらしい人生を全うしましたね。そして、クリちゃんファンがいっぱいいる、大好きな「ダグラスパーク」の墓地で安らかに眠りについて下さい。あなたの「帰天」で天国が少し賑

やかに分、地上は静かで寂しくなりました。あなたは私の心にいつまでも行き続けています。近い将来、ダグラスパークを訪問したいと思っています。グッバイ・フランク・・・。

クリリー神父様の思い出 エステル 水野英子

(聖心幼稚園主任)

面接で初めて神父様にかげられた言葉は、「本当に高校を卒業したの?」。童顔の私を中学生かと思つたと言つのです。神父様は本当にユーモアの方でした。幼稚園の子どもたちは園長先生が大好きでした。誕生会には祝福していただくのですが、よく忘れてしまう神父様に「手帳に書いておきますね」と主任先生はやさしく声をかけていらつしゃいました。それでも翌月には「手帳見るの忘れちゃった。」と飛んで来られるのです。夏の夕涼み会では西郷隆盛のように膝丈までの浴衣姿にご父兄の笑いを誘い、運動会では子ども頑張りを褒めながら、最後に「今日もつとれしいのは広島カープ優勝したヨ」との一声に

先生たちから大目玉。それでも「またやっちゃったネ」と茶目つ気たつぷりの神父様です。お話しはいつも楽しく「浜名湖に行つた時、ウサギ(うなぎ)弁当注文しちゃったア」「バスに乗つて、この次の大森で殺して(降ろして)下さいって言ったら運転手さんびつくりしたよ」とか、来日時のお話は、お腹を抱え涙を流しながら聞きました。聖心学院の英会話教室では園長先生の違ったお姿も拝見しました。神父様は私を「エちゃん」と呼び、私たちは密かに「クリちゃん」と呼びしていました。今思えば神父様が怒つたのを見たことがあります。いつもニコニコと面白い事や失敗ばかり



去つて行く。人生には時があり、始まるに時があり、終わるに時がある。定められた人生の枠内で、誰もが出会うと別れを繰り返す。去る三月七日、日曜日ミサの時、ヘルマス神父様が「クリリー神父様が天国に召されました」と言われました。闘病生活をしていられると思ひ、いつもご回復を願ひ、お祈りしてました。こんなに早く天国へ旅立たれるとは夢にも思つていませんでした。胸が痛くなり悲しく淋しくて泣きました。

クリリー神父様の思い出をたどれ マリア・クラ

のように見えた神父様ですが、人間味あふれ周りを明るく照らす「光の子」だったのかも知れません。(日本聖公会・愛知聖ルカ教会在籍)

時は人の思いに関り無く過ぎ去つて行く。人生には時があり、始まるに時があり、終わるに時がある。定められた人生の枠内で、誰もが出会うと別れを繰り返す。去る三月七日、日曜日ミサの時、ヘルマス神父様が「クリリー神父様が天国に召されました」と言われました。闘病生活をしていられると思ひ、いつもご回復を願ひ、お祈りしてました。こんなに早く天国へ旅立たれるとは夢にも思つていませんでした。胸が痛くなり悲しく淋しくて泣きました。

私の次男が交通事故にあり、苦しんでいました。カトリック信者の川口さんにお願ひして、城北橋教会に連れて行つていただきました。一九七六年四月でした。大きなお体で挨拶してくださいました。私は嬉しかったです。それから聖書の勉強が始まりました。日本人のためにご自身の苦心、努力、信仰指導を天命とさとされる、そのお志し、熱い思いは、私の心にも伝わりました。独り、夜の祈りの中で黙想される時、私は二年間、聖体訪問を致しました。御聖堂に入ると祭壇の前で夜七時から九時頃までお祈りをしておられました。時には気がついたら朝まで祈つておられたことがあつたそうです。日本人のために日本語を習得されるご努力は到底想像もつかない程、辛いものであつたこととお察しいたしています。洗礼を受ける前、神父様は「自分はどうしたらいいのか、心のままに正直になり、神様を信じ、愛してください」と諭してください、さり、私は洗礼を受けることを決心しました。川口さんが代母になつてくださり、一九七七年五月二十九日に洗礼を授けてくださいました。そして、その二年後に主人と長男にも洗礼を授けて下さいました。

信者にしていただいてから十名ぐらゐの勉強会で、クリリー神父様は「それぞれ一人一人神からいただいている恵みと使命があります。共々に夫々の場で聖霊の導きを祈り求めながら歩いていきましょう」と言つて下さいました。「私たちカトリック信者にとって、死は終わりではありません。復活への希望であり、永遠の生命への希望であります。実に神の国は、あなた方のあいだにあるのです。希望を見出すこと、祈りと愛の実践こそ信徒の努めです」と、静かに、しかし熱く説き続けてこられたクリリー神父様との出会いが、これからも私の支えとなつていくことでしょう。

城北橋教会の子供たちにも耳を傾け承えて下さつていた、微笑みながら子供から大人まで、いつも抱きしめて下さつていました、お優しい神父様、私たちにいつもお茶とお菓子を馳走して下さい、時間の経つのも忘れてよくお話をしてくださいました。帰るときはいつも見送つて下さいました。今も笑顔を出します。もう一度お会いしたかった。

クリリー神父様の何年間にわたる闘病生活を、愛の心で看病してくださいました皆様にご感謝をこめてお祈り致します。本当に有難うございました。お礼の言葉にかえて、感謝



岡田さん、天国の住み心地は如何?

マルガリタ・マリア
木全和子

私は四十年前、五反城教会からみこころ教会に転入してまいりました。社宅から、広い家に越して参りましたので、電気の

マリア・アンナ岡田貴代子さんが一月七日、帰天されました。素晴らしいお嬢さんと、お孫さんに囲まれ、祈りとパッチワークに打ち込まれていた晩年は、本当に私たちのお手本でした。ただ、この数年は透析のため週三回ほど病院通いでしたが、それでもみこころ会には元気に顔を出していただいていました。みこころ会のメンバーに思い出を寄稿していただきました。

器具がぶらさがっていれば、子供達はターザンごっこ。空き箱をみつければ基地作りです。玄関でノックする音が「トントントン」のトントントンとするので、「また悪戯して」とパツと戸を開けてみると背の高いクワーク神父様が「今そこで学生さんが売っていた花を」と言って花束を抱えて立ってみえました。そこで一番近くにいらつしやる岡田さんを訪ねて行く様にと勧め

ていただきました。そこで直ぐに訪ねてみることにしました。和裁をなさつていふこと、幼稚園に行つていふこと、夏には子供を兵さん

浴衣を縫つたり、和裁だけでなく信仰についても学ぶものが多くありました。お料理上手な岡田さんは、お昼時など、ちゃちゃつと一品こさえて、添えてくださつたり、お茶をたててくださつて、子育ての忙しさを忘れ、ほつとしたひと時でした。お餅を焼いて、その中に黒砂糖をねじ込んで、それがとろけておいしかったのを思い出します。ある時は料理の講習会、ハンパグの生地を作り、粉をつけてフライパンで焼き、お水、調味料を入れて蓋をして、・・・粉がとろみを出してくれず。で、残った粉は捨てないで近いうち

葬儀問答シリーズ 田口保

問) 仏教には仏壇があり、神式(神道)には神棚がありますが、キリスト教では何かありますか、ある場合、それは必要とされるものでしょうか。

答) 仏壇や神棚に代わるものはありませんと、答えることが聖書的といえましょう。何故ならば、旧約聖書に、「あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない。あなたはいかなる像も造つてはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造つてはならない。あなたはそれらに向かつてひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問う」(出エジプト記20・3~5)と記されているように、唯一の神の外に礼拝の対象を造つてはならないと教えられています。あくまでも礼拝の対象とするものを造つたり、拝む対象としてはならないと諭していますが、イエス・キリストを象徴する十字架を家庭内に飾り、家族の祈りの場として、例えば床の間であるとか、家庭祭壇を用いることは必ずしも偶像崇拜とは認めがたいものがあります。象徴されるものを通して、その奥義にいる神を信仰することは否定されることはないと思います。したがって、祈りの場にふさわしいものを必要とするかということ、必ずしもそうではないと言えましょう。食前の祈り、食後の祈り、朝の祈り、夕べの祈りをはじめ、いつでもどこでも神を賛美し、祈ることは可能です。十字架、家庭祭壇などを通しての方が祈りが行いやすいということであれば、あつても良いと思います。結論としては、代わりになるものはありますが、必ずしも必要とされるものとはいえないということです。

に「天ぶら、するのよ」今で言うエコも教えて下さつていました。ご自分では塩なしキュウリを美味しそうに食べてみえました。その頃から塩分の制限をなさつていたのですね。私の家の主人も、今年の四月で透析五年目になりますが、少し遅れて岡田さんも全く同じ火木土の週三回一緒でした。四時間もの長い長い時間を過ごさねばなりません。ある時は血圧が下がって酸素吸入したり、時間毎に血圧を測られ、自分だけでなく、まわりでドタバタしますし、気の休まる暇も無い四時間だつたと思います。でも、岡

田さんは祈りが出来ると、苦しみや捧げ、その苦しみを喜びに変えていらつしやる様子でした。透析のあとは、疲れて大変ですのに、毎日曜日には教会にできるだけ来てましたし、みこころ会には必ず前の方に座り、熱心でした。昨日みこころ会が集まりましたが、いつもの席がぼつんとあいていて少し淋しく感じましたが、まだお別れしたとは思えません。でも岡田さん、天国の住み心地は如何ですか。私もそちらで御一緒出来るように、残りの日々を頑張りたいと思いますので、どうぞ私共のために続けてお祈りを願いますね。

岡田貴代子さんを偲んで マリア・ローザ 大道紀美子

御霊が、神様のもとで、とわに安らかに憩いますことを願いつつ・・・突然の訃報を受け



一月十四日に、家庭から持ってきていただいた前年の枝を焼き、灰を作りました。四旬節の始まる灰の水曜日の典礼に用いるためです。水曜日に来られない人のために、次の日曜日、四旬節第一主日のミ

棕櫚の枝と灰

をつけます。人は「ちりと灰



にすぎない」ことを自覚し、回心をするためなのです。ご存知のように灰を作ったこの枝は、枝の主日(受難の主日)

驚きました。いつも聖堂の右側五列目で御ミサに与っておられる姿が目には焼きついております。時折、見かけないと、お体の調子が良くないのかなと心配しておりました。お会いできたときは、我が母の顔を見たときのようにはっとします。未だに現実が受け入れられず、ミサの折、その姿を求める私です。私が若いころ身体が弱かったとき、そして子供に恵まれなかったとき、

いつも優しく声をかけ、親身になり話を聞いてくださった岡田さん、どんなに励まされ、安らぎをいただいたことが、本当に有難うございました。手先が器用な方で、和裁の先生であり、信者さんの中にも何人かご指導を受けられていました。パッチワークの大作に挑み、入選されたり、可愛い小物もたくさん作っておられました。いつも祈りを込めての作業であつたとお察し

します。岡田さんと接した一人ひとりが沢山の温かい思い出を心に秘めておられることでしょう。三・四年前から透析を受けておられました。血圧も高かったと記憶しています。あるとき、腫れ上がった手の血管に触れさせていただいたことがありました。私の指に伝わる血流がザーツ、ザーツと音を立てていました。まるで耳で聞いているように聞こえました。静脈と動脈を繋いで

という課程を通して、つまり徹底的な痛悔と回心によって、新しい人に復活するのだということを、この棕櫚の枝とその灰は教えているのでしょうか。灰は浄化、再生と結びついていきます。こうして棕櫚の枝は勝利と殉教の象徴となつたのです。(後藤)



いるからだ・・・。透析のことは皆さんもよく耳にされ、この療法を受けていらつしやる方も身近におられると思います。大変体力も消耗します。いかばかりかと想像に絶するものがあります。みこころ会でも後藤さんの隣の席で、熱心に学ばれていました。会員の皆様に「聖心の聖母へのノベナ」の表紙カバーを作っていたら、大切に使っています。先日、後藤さんから伺いましたが、週に三回くらい透析のために病院に行かれる時、「ノベナ九日間の祈り」を治療の間を利用して、されていたそうです。それも九日間の祈りを一日に全部、今日は誰々さんのためと意向を決めて、天に召されるまで祈ってくださいといったそうです。感謝の気持ちでいっぱいです。大きな十字架を自分のものとして受け入れ、耐え、キリストに倣い、キリストとともに歩まれた岡田さん、今、この世の苦しみから解き放たれ、神様のもとで、先に召された多くの人々と再会されていると思います。そして残された家族、共同体を守り導き、神様への橋渡しとなってくださると信じています。感謝。

「介護」における霊的成長 クララ 林明恵(聖心の聖母会)



最近私は、約十年ぶりに老人介護の仕事を始めました。「介護」と聞いて、すぐ「大変でしょう。」と言われる。施設であろうが、在宅であろうが、生活全体にまで及ぶ介護は、する側もされる側も「できることなら避けて通りたい」「やっかいなこと」と認識する人は少なくないのではないだろうか。介護職員の離

職率の高さ、在宅介護における困惑、疲労、ストレス、共倒れのケースの多さはそれを表している。私もこの「介護」を「やっかいなこと」と捉えていた。認知症を患った祖母と共に過ごした約十五年は、自らの思春期と重なり「やっかい」であった。祖母の介護は、家族関係と一人ひとりの人間を浮き彫りにした。変わりゆく祖母の状態を受け入れること、家族の混乱、いつまで続くか分からない介護の重圧、逃げ道がない事への不自由さと閉塞感を感じた。家族だけの介護に行き詰まった時、福祉制度を受けられることになったが、家族の弱い部分を他人である区の担当者に話し、下の世話までしてもらうことへの抵抗を感じた。修道会入会前に就いていた介護職も「やっかい」と感じてい

た。皆さんの介護現場と、複雑な人間関係で心と体に疲労を感じていた。時々できた入居者との心の会話が癒しと活力となった。しかし未熟な私には介護職員であることに行き詰まりを感じた。それは、業務が流れ作業のようになり、援助が施設側の意向に限定され、提供するレクレーション等が幼稚に思えたからである。入居者の心の叫びに十分耳を傾けることなく天国へ召された方たちとの出会いは悔いが残る。霊的指導を受けるようになってから、介護の見方が変わってきた。「やっかい」な出会いの中に、神はおられたりする。みことばを黙想しイエスを眺めると、それは「やっかい」なことばかりである。神との関係を深めていくプロセスは、まさに介護における人間成長のプロセスそのものであることに気付いてきた。介護の現実をきちんと「見」、「受け入れ」、他者と共に生きる可能性に「ゆだねる」プロセスは、自分の現実を見、回心し、神にゆだねるといふ信仰のプロセスとシンクロする。すると、介護がまったく新しい世界に変わっていった。抱えきれないと思っていた事も案外軽い荷で収まったり、一時の忍耐だけで心が解放されたり、弱さばかり見えていた他者にも心を開き、互いの力にゆだねること

で、限界と想っていた現実が新たな可能性へと扉を開き、想像もしなかった良い方向へと動き出し、互いが生き生きし出したのである。神の存在が近くになり、神の働きが感じられるようになった。今年の司教年頭書簡「受け入れ合い、生かし合う信仰」キリストに結ばれては、この介護にも当てはまるメッセージだと思ふ。他人を受け入れること、困難な現実を受け入れて歩き出すことは、人間の力とヒューマ

ニズムだけでは成り立たない。そこに信仰の眼がなければ、互いの「いのちの叫び」を尊重することもできないし、共に神に感謝をささげることがないであろう。今なお続く回心と和解のプロセスは、忍耐が必要であるし、時間がかかる。だからこそ今、希望を持って他者を励ませる信仰の同伴者、痛みを聴ける仲間、共に考え、必要ならば助けを求められる仲間が互いに必要であると強く感じる。



新年会が一月十七日に、ホールで行われ、あわせて新成人のお祝いを致しました。しかし、祝福を受けられたのはお一人だけで、いささか寂しいものがありましたね。それで



新成人の大島佳恵さん

も片岡達哉君が、ピンゴゲームで盛り上げてくれ、交わりのある教会、みこころ共同体のために、今年もまた、お互いが協力し合っていていくスタートの場になりました。役員の皆様、新年早々ご苦労様でした。(後藤)

昨年一月から今年一月まで、毎月第四日曜日に、「カトリック教会の教え」をテキストにして、葬儀司会養成講座が行われ、沢山の方が受講されました。城北橋教会は聖心布教会の本部付き教会のため、司祭がおられないことはほとんどありませんでしたので、信徒の典礼奉仕職について、他の教会と比べると、積極的な取り組みをしてこなかったのが現実でした。しかし、高齢化社会が現実のものとなってきました私たちの共同体にとって、病者の訪問、葬儀における奉仕については、避けることの出来ない問題となってきております。そこで、この講座を受講されました清水さんと、六甲教会に転籍されました飛石さんに、そちらでの取り組みを報告していただきました。

葬儀委員の一人として アウグスチノ 清水隆

昨年からプリヨ神父様より講習を受けた事を、また感じたことを、簡略に記してみます。

まずこれからの教会は、主任司祭の多忙、不在もあり得ることなので、信徒の祭司職が求められる。その中に、葬儀、通夜があるということ。今までは前向き信仰では、信徒使徒職という言葉が語られていましたが、信徒の祭司職という言葉は、もう一歩進んで、典礼活動も行わねばならないということになります。葬儀についての学習（イ）葬儀では、何よりも復活信

仰を表明し、キリストによって死者を神のみ手に委ねる。口）神が遺族の力、励ましとなって

病者の塗油



毎月第一日曜日に行われます

くださるように祈ると同時に、洗礼を受けた生者がその復活にも結ばれる事を祈る場でもある。私の感じたこと イ）訃報は突然である。現時点では葬儀、通夜を委員で全て行うことは無理だと思ふ。組織を作り、仕事の分担が必要かと。また葬儀会社との連携により、費用の節約にならないか。口）告別式が終わって、火葬場へは数人が同行し、焼却炉の前で、私たち共同体の一員へ最後のお別れの祈りを捧げたいものです。

一月から毎月第一日曜日に「病者の塗油」が行われるようになりました。プリヨ神父様は、前任地の福井教会でも実施されており、多くの方に慰めを与えてくれました。

「病者の塗油は、病者のための油を病人に塗油しながら、司祭が行う祈りにより、その人の苦しみを和らげ、慰めを与え、主への信頼のうちに病苦をキリストの受難に合わせさせさげるよう勧め、最後の時がきているならば、平安のうちに自分のすべてを神のみ手に

病者訪問奉仕者養成コースに参加して ヨゼフ 飛石喬

何もわからないまま、病者訪問奉仕者養成コースの研修会に参加しました。昨年七月から今年二月まで計四回、大阪大司教区神戸地区の三つの教会を会場として開催されました。

かつては終油の秘跡と呼ばれていたため、死を迎えようとする方を対象とする秘跡と思っておられるかたもまだおられるかもしれませんが、第二ヴァチカン公会議後、本来の意味の問い直しとされ、対象者を臨終に限らず、身体と心の健康を回復するための秘跡となったものです。

そのために、身内や関係者だけというのではなく、今、実際に病気で苦しんでいる人のために、共同体として祈るということの大切さが理解されるようになったのではないのでしょうか。 (後藤)

参加要請があったからというのが理由ですが、昨年の母親の死と私自身の大腸ポリープの切除ということも参加の動機になりました。

大阪大司教区神戸地区の十一の教会からの毎回百人超の参加でお世話には養成委員の方々です。受講全日程を終了した人は養成委員から大司教区に報告し、終了証が渡されるということでした。

対象者は、聖体奉仕の経験者と私のように全く初めての者、それにリフレッシュ（聖体奉仕の資格を得ても三年に一回更新講習を受ける必要あり）の方々です。

各回とも、お祈りに始まり講師の方（神父様を含む）のお話の後、分ち合い、食事をはさんで午後の講義と分ち合い、まとめとお祈りで散会というものでした。分ち合いは七、八人のグループに分かれて、今聞いた講義について実施されました。できるだけ別の教会の人とのグループ分けになっていたのはよかったです。

第一回目 病者訪問コース (一) 病者の訪問に際する心構えとして単なるお見舞いでなく少しでも心と魂のケアができるように 聴くことを第一とする心を込める 病者の気持ちの変化に敏感であること 人格の

尊重

(二) 終末医療(私設ホスピスと在宅ホスピス) 近代医療が医師の不足・超勤の実態も原因ですが病人より病気だけを対象として病者の人間的側面を事実上軽視またはその余裕がないことが背景にあると思います。暮らした環境、単に物質ではない使い慣れた、見慣れた、贈られた、思い出の詰まったモノに囲まれた空間で最後を迎えたいというのは誰しも願いたいと思います。卑近な例ではそういうモノを取り去られると記憶も薄れてしまうということがあります。しかし在宅では看護の限界があり、終末医療に対応したホスピスが求められます。

第二回目病者訪問コース②

キリスト教徒としての病者訪問(マザーテレサにならって) 孤独 神様の愛を全身で受け止め、喜びにあふれているならば、わたしたちの存在全体が神様の愛の目に見えるしるしになる。その喜びが病者に伝わり、彼らの孤独を消し去る。痛み痛みは共に担われるとき耐えるものになる。意味への疑問 病者には人間の理解を超えた意味がある。誰も無意味に苦しむことはない。

病者訪問コースの分ち合いは家族の介護に伴うこと、病者訪問のときのご聖体の扱いのこと、お見舞いする病者ご本人や

家族との対応にまつわる困難などについて忌憚なく話しができました。病気のかたと訪問者の人間的な相性の問題があり、あの人には来てほしくないということもあるか。普段の元気な姿で教会にきていた方が、病気でやつれたところを見せたくないということも。

第三回目基礎コース

(一) 聖書と信仰共同体についてのお話 信徒使徒職と信徒奉仕職に関連したお話

(二) ペトロの希望の弁明(ペトロの手紙一三・一五―三・一六)

『心の中でキリストを主とあがめなさい。あなた方の抱いている希望について説明を要する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい。それも、穏やかに、敬意を持って、正しい良心で弁明するようにしなさい。』 第二バチカン公会議以降、司祭職も結婚も共に召命であり祝されている。日本の社会環境とイエズス様の教えの違いとして、仕えられることよりも仕えることを、イエスかノーかをはっきりさせる選択することに責任が伴うということのお話がありました。基礎コースで分ち合いです。『いまさら教会って何?』 『わたしの希望』 『そんなちからがどこにあるの?』 というテーマでした。私のような年齢を経ての受洗者と幼児洗礼の方とでは若干感じ方が違うな

という気がしました。一番印象的だったのは『教会のいろいろな祝日よりも葬儀が最も教会外の人には来てほしくないというのだと思つた。肉親の葬儀に外部の方が参列されたが何とその中で八人聞き違いでなければ』の方が受洗された。わかり易い言葉で異なる視点でのお別れの式が強い影響を与えたもので自分自身も動かされた』と証しされたことでした。

第四回目聖体コース(聖体とミサ)

(一) 最後の晩餐と主日の意義 聖週間の中の洗足式は神と子の共に仕えあう関係を示している。晩餐には神に捧げられたものをともに分ち合うという意味があった。晩餐を共にすることは救いと交わりを表わしている。平和のあいさつはもっと強調されてよいこと。主日・日曜日は復活したキリストと出会う記念日。主の招きに応え、主の身もとに集い、救いの業に感謝し賛美の捧げものを捧げる喜びの日。またもう一度自分の心の姿勢を振り返り、神の前で本当の自分を見つめ直す日。

(二) ミサの流れと意味

典 礼全体が言葉で表されないこと 象徴である キリストの復活は過去の事柄でなくミサの中で復活されたキリストに出会う(キリストの現存と聖霊) ミサという言葉の原義はラテン語

のイテ・ミサ・エストで派遣されること。主の食卓で戴いた力に支えられ、そのままミサは今週の日常生活に繋がっていくもので、クライマックスではなく、始まるもの(主日は週の第一日)である。ミサの式次第の解説 聖体奉仕者は少なくとも月に一回ゆるしの秘蹟をうけなければならぬ。わかっているようで解っていないこわとをていねいに解説していただいたのがよかったです。分かちあいの中ではゆるしの秘蹟や大斎・小斎について話しが進みました。その後、参加者全員、聖堂で派遣のミサに与り解散となりました。

研修を終わって 背景として

司祭の高齢化と減少、信者の高齢化を実感しています。一月に実施した壮年会の参加者を見ても六十歳以上が九割、六十五歳以上が八割、七十歳以上が六割ということでした。老老介護とか認知介護とか独居老人とか、孤独死とかの現代用語が飛び交っていました。誰もが避けて通れない問題に教会も直面している状況の中で信徒全員がそれぞれ使徒職・更には奉仕職を果たすことが求められていることを感じます。

《最後に》 第一回に講義を戴いた私設ホスピスの院長様が大切にしていると紹介があった祈りです。勇んでしてあげることが、

良しとし勝ちな私たちですが、

していただくこと、お世話になることに耐える(?) のもたいへんなことと思つ次第です。「最高の業」ヘルマン・ホイペル神父の祈り この世の最高の業はなに? 楽しい心で年をとり 働きたいけれど休み 失望しそうな時に希望し 従順におのれの十字架を担う 若者が元氣いっぱい歩むのを見ても妬まず 人の為に働くよりも謙虚に人の世話になり 弱つても もはや人の為に役立つと 親切で柔和であること

光りの重荷は神の賜物 古びた心に これ最後の磨きをかける 誠の故郷に行くために。 己をこの世につなぐ鎖を少しづつはがして行くのは真にえらい仕事

こうして何も出来なくなればそれを謙遜に承諾するのだ 神は最後に一番よい仕事を残してくださる それは祈りだ 手は何も出来ないけれど最後まで合掌できる愛する全ての人の上に 神の恵みを求めるために。 全てをなし終えたら 臨終の床に神の声を聞くだろう 「来よ 我が友よ われ汝を見捨てし」と・・・

緊急支援活動 最終報告

城北橋教会緊急支援活動は、この三月を以って予定通りに支の報告と世話係からの挨拶をさせていただきます。

一応の終了を致しました。沢山の支援を有難うございました。ありがとうございました。

	キログラム	リットル	個数	収入(円)	支出(円)	残高(円)
米	2,560				498,381	
パスタ	306				85,750	
オイル		427.5			112,209	
砂糖			302		47,776	
ミルク			140		172,112	
おむつ			25		32,402	
洗剤			114		17,512	
豆	200				57,110	
女性用品			3		1,682	
おしりふき			27		3,936	
交通費			7		34,000	
消費税					2,014	
その他食品			109		22,465	
その他雑貨			53		7,671	
信徒会				100,000		
城北橋教会				200,000		
イースターエッグ				30,000		
岐阜教会				100,000		
値引き				766		
毎月の募金				590,154		
献金				107,570		
献金訂正					1,000	
合計				1,128,490	1,096,020	32,470

食品(インスタ食品、菓子、缶詰、野菜、パスタなど)	923
調味料(油、砂糖、醤油、ケチャップ、ドレッシングなど)	91
雑貨(タオル、ティッシュなど)	193
衛生用品(オムツ、女性用品など)	44
洗剤各種(シャンプー、石鹸、リンス、洗剤など)	470
毛布、マット	19
電子レンジ	1
	1,741
その他各種衣類	多数

あつという間の一年でした。皆様からのご協力もたくさん頂き、何とか一応の終わりとする事ができました。このような活動が必要のない日が、早く来ることを祈りたいです。ありがとうございました。ありがとうございました。(マルガリータ 三井造子)

新型インフルエンザからも守られ、なんとかお仕事を終えることができました。世にある困難は様々ですが、今は全て神に感謝の気持ちです。皆様の大きなご支援、ブラジルやペルーの方達のことは忘れられないと思います。ありがとうございます。(幼いイエスのテレジア 田村由美子)

支援物資の配布の日と私用とが重なることが多く、結果的に

庭が明るくなりました
三基新設され、夜間には少し暗かった庭が明るくなりました。東南の隅に設置されましたものには、まだ照明灯が付いていませんが、マリア様の前庭のものは、夜桜専用みたいですね。



買い出しなどのお手伝いが主になつてしまいました。このプロジェクトにたずさわらせていただけたことは、私にとって大きなお恵みでした。無事にここまでこれたことを神様に感謝いたします。また、多くの方々の祈りや、ご理解、ご協力に支えられた一年であったことにも、感謝しております。(ルイズ 八幡京子)

日本の経済を支えて下さっている外国人労働者のため、いち早い景気回復を願っています。(ベルナデッタ 柴田かをる)



リーマン・ショックが世界中を駆け回り、日本では特に製造業に大きな痛手を与えました。その結果、外国人労働者など正社員でない人達が、まるで在庫調整のように、職を奪われました。日本での仕事に見切りをつけ、帰国する方もみえましたが、子どもを抱え、その日をどう暮らしていったらいいのか、途方に暮れている人たちも大勢おられました。そこで、一年間と期限をきつて、そうしたご家族に緊急の支援を行ってきました。その結果、昨年の三月から今年の三月まで、延べ五百七十五家族のブラジル人やペルー人に支援をすることができました。担当していただきました、四人の世話人は実に誠実に、そしてさりげなく、その責任を全うされました。感謝致します。(後藤)

信者動向

【転出】

さよならなら、お元気で

二〇一〇年二月十日

札幌教区 円山教会へ

アントニオ 高田 裕行

二〇一〇年三月十八日

名古屋教区 緑丘教会へ

ミカエル 殿村 武

マリア 恵美

ラファエル 和也

二〇一〇年三月二十一日

名古屋教区 金沢教会へ

ミカエル 山本 光太郎



【転入】

宜しくお願ひします

二〇一〇年三月三十一日

横浜教区藤が丘教会より

小さき花のテレジア 大岡敦子

【洗礼】

おめでと〜いございます

編集後記



「復活おめでと〜いございます。散り急ぐ桜も、なんとか持ちこたえて、ご復活を飾ってくださいました。四十年ほど前になりましたが、洗礼を授かるにあたって、聖週間の典礼のため、会社を早退して少し早めに教会に来ていました。その時見ました夕焼けに映える桜は見事としか言いようがありませんでした。

しかし、もつこりと膨らんでみえるほどだった教会の桜も、次第に老いて朽ちてきており、枝を切り落としたり、支柱を立てて守らなければならなくなってきました。私たちこころ共同体も高齢化が進み、桜と同じように、今まで以上に支えあう必要性を痛感いたします。今、

二〇一〇年三月十四日
 聖アンナ 吉田 愛子
 マリアンナ 山田 綺華
 (あやか)
 ルカ 山田琥太郎
 (こたろう)

【結婚】

おめでと〜いございます

二〇一〇年一月二十三日

堀之内 佑哉

マリア・アナスタシア

可児 優

【帰天】

寂しいですね

二〇一〇年一月七日

マリア・アンナ 岡田 貴代子

(享年八十四歳)

二〇一〇年二月十四日

マリア 谷 みつえ

(享年八十六歳)

れ合い、生かし合って交わりの教会を実現していこうと思えます。この「みこころ」も、ひとつの絆になるようにと願っています。

牧野神父様と高山神父様の銀祝が近づいてきました。五月八日(土)午前十一時からです。

他教会からすでに、約二百名ほど参加される予定になっております。城北橋教会も、いよいよご復活祭から、参加者の募集を始めます。つきましては、お二人の神父様に一人、二〜三千円のお礼をお願いすることになりましたので、宜しくお願ひ致します。最後にお断りしますが、文章

には筆者名を記し、記述の責任を明らかにしております。それはカトリックの公式な見解と異なる場合もあり、個人の意見であることを明記するためです。

(後藤明憲)

